

MSM によるハッテン場での性交渉と交際相手との性交渉の意味づけ
～コンドーム使用との関連における一考察～

研究分担者：山崎 浩司（東京大学大学院人文社会系研究科）
研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部）
研究協力者：横山 葉子（京都大学大学院医学研究科）

研究要旨

目的：本研究では、インターネット利用層である MSM（HIV 陽性・非陽性の双方を含む）が、自らの性行為に対してどのような意味づけを行なうのかについて、特にハッテン場での性交渉と交際相手との性交渉を中心に分析し、コンドーム使用との関連で考察する。

方法：2007 年～2010 年に、合目的的層化抽出および機縁法により対面で 7 人、メールで 35 人の計 42 人の MSM にインタビューして得たデータを統合して改めて継続比較法で分析し、文献レビューから得られた知見と絡めて考察しなおした。

結果：対象 MSM は、交際相手との性交渉を特別な相手のために双方向的な快を実現すべきものとみなす。この快は身心の気持ちよさであって身体的な快に限定されず、親密さやコミュニケーションを介した相互尊重的な心情が込められている。交際相手との性交渉では、コンドームはこの親密さやコミュニケーションに水を差すものとされ、敬遠されやすい。一方ハッテン場での性交渉は、原則ステディな関係への発展は望め（ま）ない一回限りの刹那的邂逅——特に身体的な快楽に照準した独りよがりな性欲処理——であると、多くの対象者は捉えている。彼らは、ハッテン場を不特定多数との性交渉の場であり、交際相手が見つかるまで孤独を紛らわすために性欲を発散的に満たす独り者のストレス発散用風俗のような所だと見る向きがある。ただ、この場合でもハッテン場での性交渉を性感染症感染リスクのある行為であり、コンドーム使用の徹底などによって、予防が必要な行為とは捉えている。しかし、実際の暗闇における言語コミュニケーションを基本的に排除した空間における性交渉では、力関係や状況的要因から不使用となる可能性がある。対象者の中には、ハッテン場での性交渉を交際相手との性関係における気遣いやマンネリ化から自分を解放し、性交渉に未知の魅力や気楽さを求める行為と意味づける者もいる。つまり、彼らは交際相手との性交渉をもちつつ、時折ハッテン場でも不特定多数と性交渉をもつ。

考察：対象者の日本人 MSM は、交際相手との性交渉とハッテン場での性交渉を明確に異なるものとして位置づけていた。前者は相互信頼が意味づけの中心なため、それを脅かすコンドーム使用を促すことは難しい。より現実的なのは、交際相手と性交渉しつつハッテン場で不特定多数と性交渉をもつクロスオーバー集団に対し、ハッテン場における性交渉でのコンドーム使用を徹底する教育を行うことだが、それを実施する上で参照すべきは、Kippax らの“negotiated safety”（HIV 感染に対する交渉合意による予防）である。男性間で誠実さ、信頼、コミュニケーション等について十分に考え、必要なスキルを獲得するプログラムを充実させることで、パートナー間で交際関係外の性交渉に関して言葉で明確な交渉合意をし、非感染の安全性を確保する可能性が高められる。これを日本の MSM の文化的特性に適合した形で実現することが課題となる。

A. 研究目的と背景

本研究では、インターネット利用層である MSM (Men who have Sex with Men: 男性と性行為する男性) が、自らの性行為に対してどのような意味づけを行なうのかについて、特にハッテン場での性交渉を中心に、コンドーム使用との関連で考察する。

2008 年～2010 年に実施したインタビュー調査の経験から、対象 MSM の性行動に関しては、「ハッテン場」の持つ意味が大きいが明らかになってきた。経験的には長らく知られていたこの事実について、日本における実証的な研究の蓄積を調べたところ、我々の知る限り少ない。

今年度の研究では、このテーマに関して先行研究のレビューを踏まえ、過去 2 年度間で収集・分析してきたデータを統合的に分析することに主眼を置いた。量的研究においては専攻研究を調査実施に先だって済ませる傾向があると思う。しかし、質的研究ではデータが収集および分析されて初めてどういった文献が分析テーマと密接に関連しているのかが明確になる側面があるため、調査の進行に伴って継続的に行われることが少なくない。

海外においては、MSM と“cruising spots”や“sex venues”およびコンドーム使用に関連した実証的研究が数多く存在する。しかし、そうした研究の知見が今回重点的に照準する日本の MSM と「ハッテン場」およびコンドーム使用という文脈でもどこまで通用するのか、あるいはどのような違いが見られるのかは、明らかになっていない。

本研究では、この重なりと異同の考察も、これまで収集したインタビュー・データの帰納的な分析と、先行研究を二次データとする総合的な分析とで行い、日本の MSM に対する HIV 感染予防のあり方を検討する。

B. 研究方法

1. データ収集

2008 年～2010 年に、合目的的層化抽出および機縁法により対面で 7 人、メールで 35 人の計 42 人の MSM (HIV 陽性・非陽性の双方を含む) にインタビューを実施した (詳細は 2008 年度および 2009 年度報告書を参照)。これが一次データであり、二次データが先行研究である。

質的研究においては、先行研究もデータであるにとらえることができる¹。質的研究における「分析」とはすなわち「解釈」である。より具体的には、文字化されたインタビュー逐語録や観察記録 (=一次データ) の解釈であり、結果が数値である量的研究における解釈とは意味が異なる。つまり、文字化されたものという意味で先行研究 (=二次データ) は、一次データ同様に解釈 (=分析) の対象になるわけである。

2. データ分析

一次データについては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)² を活用し、分析ワークシート (次頁に具体例を提示) を使いながら継続比較分析を展開した。具体的手続きは以下のとおりである――

- ① 目的に関連していると思われるデータ部分 (a) に注目し、分析ワークシートのヴァリエーション欄に書きこむ。
- ② 分析テーマと照らし合わせて (a) を解釈し、端的に定義する (=A)。
- ③ (A) に基づき、それに対応する概念名 (=A1) を生成する。
- ④ 目的に関連していると思われる新たなデータ部分 (b) に注目し、解釈する。
- ⑤ (b) の解釈を定義 (A) と比較検討し、類似したものと判断されれば、それを含まれるように定義 (A) を修正し (=A')、それに対応させて必要に応じて概念名も修正する (=A1')。異質なものと判断されれば、その解釈を別に新たに定義し (=B)、それに対応する概念名を生成する

- (=B1)。
- ⑥ 全データにわたって④～⑤をくり返し、新たな定義と概念の生成 (C/C1、D/D1、E/E1・・・) と、生成済みの定義と概念の修正 (A'/A1'→A''/A1'', B/B1→B'/B1'・・・) を、必要に応じて続ける。
- ⑦ ④～⑥をくり返す過程で、同時に異なる概念の関係性を吟味し、最終的なストーリーライン (=結果) を形作っていく。
- ⑧ ①～⑦の全段階において、理論的メモ欄に思いついたこと、考えたこと、選択的に判断した根拠などを書き続ける。

分析ワークシートの例

分析テーマ	対象者はハッテン場での性交渉をどう意味づけているのか？
概念 3	刹那的邂逅 (one-night stand/fleeting pleasure)
定義	原則ステディな関係への発展は望めない／望まない、一回限りで一時的な快樂関係
パリエーション	<ul style="list-style-type: none"> ● ハッテン場での性交渉は、やはり刹那的な気持ちになりますね。一期一会といえますか、よほど気持ちが通じ合わないとその相手と再び会うことはないと思います。(CAT 40s : 103) ● ハッテン場は一日限りのエッチがほとんどで彼氏や友達と付き合いたくても (性行為で) イッたらすぐに相手が去る……。 (MAS 30s : 84) ● ハッテン場では、終わった後すぐに帰る……等、好き勝手にできますが、彼氏相手ではそうは行かない……。 (KAN 30s : 124) ● 初めの頃はどこに行けば出会いがあるのかと想いの元、ゲイバーもハッテン場も同じように感じていました。何回か行く事により、ハッテン場は本当にやるだけの場所と分かり、知り合いが増えるわけでもないため、足が遠のきました。(JRO30s : 59) ● 交際相手はいるけど、そんなに一途ではないので、たまたまみかけたタイプの人とHできるかもしれないという期待でハッテン場に行ったり……する。(TAN 30s : 73) ● [ハッテン場に行っていたのは、やっぱり特別な誰かと出会うために?] いや、出会うためというよりは、もうその時だけのことですね。そのあとにつながる関係を求めたわけではないです。それはたぶん、僕、うん、現実的じゃないなと思っていて、そういう所で出会って、そのあとに人間関係が続くなんてことは、期待もできないし、最初から期待してないですね。(KID 30s : 7)
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ● CAT 40s : 103 の語りからすると、こうした一回限りの出会いと関係においても、わずかながら言語的なやりとりが発生する余地があることを暗示していないだろうか。つまり、かなり気持ちが通じ合えば、お互いに電話番号を交換したりして、ステディな関係性への発展を期待することがあるということである。 ● MAS 30s : 85 には、ハッテン場に「彼氏や友達探しても来ているのに出来ないのがさびしい」との語りがある。こうしたハッテン場に対する意味づけが、他にも事例として見られたら、分析ポイントを「対象者はハッテン場をどう意味づけているのか？」とし、独立した概念として成立させようと思う。 →概念〈出会いが期待できる場所〉へ ● JRO30s : 59 は、この後「やはり、会話をしたりする事で知り合いが増えるのを知って、ゲイバーに向かったという感じです」という語りが続く。ハッテン場での「刹那的邂逅」では、会話が基本的にないことが示唆されている。←概念「独りよがりな性欲充足」とリンク ● 「刹那的邂逅」という概念は、「独りよがりな性欲充足」だけでなく、「未知の魅力や気楽さの希求」といった概念とも関連がある。

以下、下線部は生成された概念を表す。また、事例提示では、アルファベット3文字の仮名、年齢層〔例：30代=30s〕：逐語録ページ番号を記載している。

C. 研究結果

1. 結果の概要：ストーリーライン

対象 MSM は、ハッテン場での性交渉と異なり、交際相手との性交渉を特別な相手のために双方向的な快を実現すべきものとみなす。この快は身心の気持ちよさであり身体的な快に限定されず、親密さやコミュニケーションを介した相互尊重的な心情が込められている。交際相手との性交渉では、コンドームはこの親密さやコミュニケーションに水を差すものとされ、敬遠されやすい傾向も見られる。

一方ハッテン場での性交渉は、原則ステディな関係への発展は望め（ま）ない一回限りの刹那的邂逅——特に身体的な快楽に照準した独りよがりな性欲処理——であると、多くの対象者は捉えている。彼らは、ハッテン場を不特定多数との性交渉の場であり、交際相手が見つかるまで孤独を紛らわすために性欲を発散的に満たす独り者のストレス発散用風俗のような所だと見る向きがある。

ただ、この場合でもハッテン場での性交渉を性感染症感染リスクのある行為であり、コンドーム使用の徹底やコンドームなしのオーラルセックスの拒否によって、予防が必要な行為とは捉えている。しかし、実際にはコンドーム使用につながる理性的判断やコミュニケーションが二の次となりがちであり、結果的に不使用となる可能性がある。

一方で、対象者の中には、ハッテン場での性交渉を交際相手との性関係における気遣いやマンネリ化から自分を解放し、性交渉に未知の魅力や気楽さを求める行為と意味づける者もいる。つまり、彼らは交際相手との性交渉をもちつつ、時折ハッテン場でも不特定多数と性交渉をもつ。この場合、ハッテン場で

のコンドーム（不）使用は、交際相手との関係性に大きく左右される。

2. 個別の意味づけ（各概念の説明）

以下では、ストーリーラインを構成する各概念（個別の意味づけ）について詳しく論じるが、コンドーム使用に関連する議論（例えば、感染リスクのある行為に関すること）は、考察において合わせて論じることとする。

2.1. 特別な相手のために双方向的な快を実現

ハッテン場での性交渉と対照的に意味づけられているのが、交際相手との性交渉である。それは特別な相手のための双方向的快の実現と意味づけられる。

ハッテン場における性交渉は自分が気持ちいいことが重要だけど、交際相手との性交渉は相手が気持ちいいことが重要だと思います。（SKM 20s: 71）

ステディな関係にある性交渉は、性欲はあまり関係ないと思います。相手の存在を再認識するというか、自分の居場所の確認のための性交渉と思います。（AOL 40s: 45）

ハッテン場では、終わった後すぐに帰る/シャワーを浴びる/寝る、等、好き勝手にできますが、彼氏相手ではそうは行かないと思います。交際相手とのセックスは、単なる性交渉だけじゃなくて、+（=プラス）コミュニケーション、という部分があるんでしょうね。（KAN 30s: 124）

交際相手との性交渉で強調されるのは、その行為がその人とでなければならないということと、コミュニケーションを介した相互尊重の思いの交感を基盤に、特に相手の身心

両面の気持ちよさの実現が目指される行為でなければならないということである。

2.2. 刹那的邂逅

一方、ハッテン場での性交渉は刹那的邂逅とみなされており、原則としてそこで出会う相手とは性交渉をもってもステディな関係への発展は望めない、あるいはそうしたハッテンを望まない、一回限りで一時的な快樂関係と定義できる。

ハッテン場での性交渉は、やはり刹那的な気持ちになりますね。一期一会といえますか、よほど気持ちが通じ合わないとその相手と再び会うことはないと思います。(KTN 40s: 103)

〔ハッテン場に行っていたのは、やっぱり特別な誰かと出会うために?〕いや、出会うためというよりかは、もうその時だけのことですね。そのあとにつながる関係を求めたわけではないです。それはたぶん、僕、うん、現実的じゃないなと思っているんで、そういう所で出会って、そのあとに人間関係が続くなんてことは、期待もできないし、最初から期待してないですね。(KXX 20s: 7)

ハッテン場における性交渉の意味づけが、最初から以上のように、相手とのステディな関係への発展を望めない刹那的なものであったかという点、必ずしもそうではない。

初めの頃はどこに行けば出会いがあるのかと想いの元、ゲイバーもハッテン場も同じように感じていました。何回か行く事により、ハッテン場は本当にやるだけの場所と分かり、知り合いが増えるわけでもないため、足が遠のきました。

(JRO 30s: 59)

JRO の場合、KXX がハッテン場を訪れた「最初から」そこに特定の交際相手と出会うことを期待していなかったのとは異なり、「初めの頃は」そうした出会いを期待していた。この差異は事前にハッテン場に関する情報を、MSM の仲間からの口コミであれ、インターネットや雑誌などからの情報であれ、入手していた者としていなかった者（あるいは、入手できた者とできなかった者）との違いである。この点については、KXX が日本最大のゲイ・コミュニティがある東京出身であるのに対し、JRO が地方出身であったことと関連している可能性がある。

2.3. 独りよがりの性欲充足

刹那的邂逅としてのハッテン場での性交渉は、また、性交渉する双方が見知らぬ他人同士であるがゆえに、相手への配慮をせず、自分の性欲を利己的に処理することだけに専念する機会——つまり、独りよがりの性欲充足——であるとも意味づけられている。端的にいえば、「ハッテン場での性交渉は、セックスというよりはオナニーに近い」(AKR 20s: 42) という。

彼氏〔との性交渉〕は「大好きなのでやる」、〔ハッテン場で〕他の人とやるときは「性処理」です。(YSI 20s: 60)

ハッテン場での〔性〕交渉の場合、相手を人として見ていない場合があります。ただの性欲の捌け口となる「モノ」としてしか見ていない場合も。性行為後に話などをした場合は変化はありますが、性交渉前に何も会話を交わさない場合、とにかく自分本位で考えがちです。(MAR 30s: 81)

「ハッテン場」とは、セックスをするための場所です。……「ハッテン場」はいやです。……僕にとっては、知らない相手とほとんど会話もなくセックスをすることは、あり得ないことなので。(STO 40s: 68)

STO と MAR の語りから、さらに過去 2 年間の分析結果（平成 20 年度・21 年度の報告書参照）からも、ハッテン場では会話をしないことが標準的であることがうかがえる。言語的コミュニケーションが不在な中、「自分本位」な性交渉が展開する。双方が自分本位であるということは、そこに暗黙の主導権争いが起こることが当然予想され、その勝者がそこで展開する性交渉全体のあり方を規定することになる。いいかえれば、独りよがりの性欲充足は、性交渉をもつ者同士の沈黙の駆け引きでもある。

ただし、この駆け引きあるいは主導権争いが、まったく対等な立場で展開するというわけではない。挿入する側の役回りなのか、あるいは挿入される側の役回りなのかによって、ここで展開する性交渉全体のあり方が、そして HIV 感染リスクが、規定されることになる。

2.4.不特定多数との性交渉の場

上述の STO の語りからもわかるように、ハッテン場は基本的に、不特定多数の相手と一度きりの性的関係を取り結ぶ場である、と対象 MSM には理解されている。

ハッテン場は、自分は、不特定多数の人との〔性的な〕付き合いは、したくないので、興味が無いです。(TNK 40s: 36)

ハッテン場でやる人はただやるだけ。同じ人と何回もしない。(YSI 20s: 60)

同性間では子供が出来ないというコト

……なので、〔特にハッテン場で〕不特定多数と経験している方は多いのではないかと思います。(TKN 30s: 63)

こうした認識は、当然ながらそこでの性交渉が刹那的邂逅であるとの意味づけとリンクしている。

2.5.独り者のストレス発散用風俗

ハッテン場における性交渉と交際相手との性交渉とで、これまで見てきたような対照的な意味づけがされているが、この違いをヘテロセクシャル男性にとっての性風俗における性交渉と交際相手との性交渉との対比と、パラレルなものともみなす見方がある。

それは、いわばハッテン場を独り者のストレス発散用風俗ともみなす見方である。つまり、ハッテン場は交際相手がいない者が孤独を紛らわすために性欲を発散的に満たす風俗のような場所だ、というわけである。

誰か恋人を作るようになってからはまったく〔ハッテン場に〕行かなくなったって〔彼氏は〕言っていました。風俗みたいなもんじゃないんですかね？(KSA 10s: 83)

ハッテン場は「恋人がいない男同士のリアルと性の発散場所」「孤独を解消できるひとつの場所」。彼氏ができれば行く必要はない……(MSD 30s: 60)

独り身だった時は〔ハッテン場に〕行っていましたね。〔それはやっぱり出会うために？〕いや、出会うためというよりは、もうその時だけのことですね。そのあとにつながる関係を求めたわけではないです。(KXX 20s: 7)

ヘテロセクシャル男性にとっての性風俗と

MSM にとってのハッテン場が本当にパラレルといえるのかどうかは、前者に関する調査結果の確認が必要である。しかし、ある対象 MSM は――

原則、同性愛者における同性間の〔性〕関係と、異性愛者における異性間の〔性〕関係はほぼニアリー〔＝ほぼ〕イコールではないかと思えます（NGT 30s: 141）

と述べ、両者の相似を主張しているし、STO も次のように語り、両者の違いが実際の違いというよりは、社会的に創造され強化された違いであるとの考えを示している。

「ハッテン場」というものが存在しそこでセックスをするゲイ男性たちが存在することは、同性愛に対する世間の偏見がなかなかなくなることに寄与しているだろうと個人的には思っています。（もちろん、異性愛者も風俗を利用するのですが、一般の人々の何割かは、同性愛者のセックスを特別視し、「ハッテン場」の存在はその「特別視」を強化することに寄与しているんじゃないかと思っています。）（STO 40s: 69）

2.6.未知の魅力や気楽さの希求

では、対象 MSM は交際相手が見つければハッテン場に行かなくなるのかといえば、必ずしもそうではない。というのも、交際中の者にとって、ハッテン場での性交渉は、見知らぬ新たな相手と性関係をもつことで、性交渉に未知の魅力や気楽さを求める行為ともとらえられており、交際相手との性交渉における気遣いやマンネリ化からの解放を実現してくれる側面があるからだ。

〔交際中でもハッテン場で性交渉をもつのは〕違うセックスがしてみたい、

というのが〔理由としては〕妥当かな？と……。交際相手とのセックスに多少の不満が出てくる場合があります。今日は激しくしたいけど、相手は嫌がる。H DVD〔アダルトビデオ〕みたいなセックスしたいけど、同上〔＝相手は嫌がる〕。交際相手はいるけど、そんなに一途ではないので、たまたまみかけたタイプの人と H〔性交渉〕できるかもしれないという期待でハッテン場に行ったり……。する。（TNK 30s: 68-73）

交際相手の場合はお互いの細かいかゆいところ？がわかっているの、どこをどうすれば相手を感じる、喜ぶのわかります。ハッテン場などではお互いにわからないので最初は戸惑いますが、それが魅力かもしれません。（SOR 40s: 68-9）

もちろん、独り者のストレス発散用風俗という意味づけの節で確認したように、ステディな交際相手が見つければ、ハッテン場は一切行かなくなる者もいる。この割合がどの程度なのか――つまり、交際が始まれば行かなくなる者と始まっても行き続ける者との比率――は、定かではない。また、両者は個々人において一貫した志向なのか、それとも同じ個人でも交際相手ができたら行かなくなるときと、相手ができても行き続けるときがあるのかというのも、本研究では定かではない。

D. 考察

対象 MSM の性交渉に対する意味づけは、以上のようにハッテン場での性交渉か、交際相手との性交渉かを軸に展開する。より厳密には、性交渉の相手に対する心身両面の配慮およびコミュニケーションが、あるかないか・多いか少ないか、そしてマンネリやルー

チン 対 新鮮さや自由、といった二項対立で整理できる。

さて、こうした性交渉に対する意味づけとコンドーム使用はどのように関わっているのだろうか。

交際相手との性交渉を特別な相手のために双方向的な快を実現すべきものと意味づけ、相手への配慮と相手とのコミュニケーションが重視されるということは、性感染症予防としての自発的なコンドーム使用や、コンドーム使用に関する積極的な話し合いがもたれる可能性がそこに見出される。現にそれを支持する語りが見られる一方で、「信頼」を基盤にもつはずの交際関係においては、コンドームを使う必要はないとの解釈も見られる。

次の語りでは、SHNの交際相手がそのような意味づけをしており、SHN本人は異なる認識をもっているケースである。

最近、つきあいだした人がいるんですけど、セックスをしようっていう時に、コンドームをつけたくないって言い出したんですよ。で、それはいかんよって言って、僕はつけたいし、まあ、つけるのは彼の側なんでつけてほしいって言ったんですけど、でも恋人同士はつけなくてしょって言われた時に……うーん、何でじゃ、っていう話なんですけどね。まあわかるんですよ、何か感情としては僕もわかるんですけど。……まあそれは〔相手を〕信じてないということになるんじゃないかな。

結局……そう、割とこの子は珍しいなと思ったんですけど、外で〔他の人と性交〕してくるような、要は、こうゲイの場合って結婚みたいな囲い込むパートナーシップの制度がないので、長くつきあってると、そのうち外でセックスをしても、お互いよしみみたいな、オープンリレーションシップみたいなのを築こう

っていう動きを取る人たちもいる。まあ一部そういう人が周りにケースとしてあるわけですけど、そういう状態になったらこの2人の間では〔コンドームを〕つけなければいけない、みたいなことを言い出すわけですよ。……まあ、その途中には外で〔他の人と〕黙ってやっちゃったみたいな時があるわけで。なんかそのためにも僕は〔コンドームをつけた方がいいと考えている〕。(SHN 30s: 15-16)

SHNのパートナーが主張しているのは、いわゆる“negotiated safety”（HIV感染に対する交渉合意による予防）と呼ばれるものである³。Kippaxらによって1990年代に提示されたこの概念は、①お互いにHIV陰性（あるいは陽性）同士であるパートナーが、②交際関係におけるアナルセックスでコンドームを使わないようにすると同時に、③交際関係外の性交渉についての交渉合意により非感染の安全性を確保する、というものである。③については、交際関係外の性交渉を一切しない、というものや、する場合には必ずコンドームを常用する、といったものがある。上の主張は後者に該当する。

上記の語りに出てくる「外でしてくる」は、必ずしも「ハッテン場でしてくる」に置き換え可能ではないかもしれないが、少なくとも都市部在住のMSMが最も容易に性交渉を成立させられる場所がハッテン場であることからすれば、その可能性は低くないであろう。

そして、対象MSMの比較的多数が、ハッテン場での性交渉は、不特定多数との性交渉による性感染症への罹患リスクがあり、コンドーム使用による予防が必要な行為と意味づけている。

ハッテン場ではどんなことがあってもコンドームを使うようにしています。ある程度信頼できるような相手だと、フェ

ラチオの際は使わないこともあります。アナルセックスにおいては、100%使います。やはりいろいろな性感染症を防ぐ意味で、コンドームを使用しないといろいろと不安がよぎり、性行為にも集中できなくなったり、後で不安になってしまうので、使うようには心がけています。(MAR 30s: 81)

ハッテン場に絞って言えば、不特定多数の人間との性交渉があるため、性病に關しての注意は必要だと思います。コンドームの使用など、特に注意を払うべき所だとは考えています。(NGT 30s: 147-8)

ハッテン場における性交渉に対するこうした強い HIV/STD 感染リスクの認識は、実際の性交渉における沈黙の駆け引きに勝ってコンドームを使用すべく主導権を握るか、オープンな言語コミュニケーションによってコンドーム使用を要請あるいは表明すれば、現実的に実効力のある HIV 感染予防行動に帰結する。現に MAR は「どんなことがあってもコンドームを使うようにしています」といっている。

砂川らが「商業ハッテン場」と「ハッテン場以外」での性交渉におけるコンドーム使用率を調査した研究でも、「ハッテン場以外」の方がコンドーム使用率は低いという結果が出ている⁴。ここでいう「ハッテン場以外」とは、「あらゆる<ハッテン場>を除外した存在として定義されており、基本的にプライベートな空間と考えると良い」ということなので、本研究でいう交際相手との性交渉に該当する。従って、ハッテン場での性交渉の方がステディな交際関係における性交渉よりも、コンドームは使われているということである。

しかし、同じ研究で「商業的ハッテン場」でコンドームを使わない者は、「ハッテン場以外」でも使わない傾向が強く見られたと報告

されている。つまり、これらの者たちと彼らのパートナーの間では、“negotiated safety”が機能していないか、あるいはそもそも両者の間に明確な言語コミュニケーションを基盤とする交渉(negotiation)が存在しない、ということであろう。砂川らの研究では、“negotiated safety”を視野に入れていないため、交際外の性交渉について合意を目指した交渉がパートナー間であったかどうか定かではない。

我々の対象者の語りからうかがえたのは、“negotiated safety”の要件である、交際外性交渉に関する明確な言語コミュニケーション・交渉は、どちらかという不在であるということであった。このことは、先の SHN の語りでも、こうした明確な言語コミュニケーションによる交渉に乗ってきた自分のパートナーを、「割とこの子は珍しいなと思ったんですけど」と形容していることからわかる。つまり、交際していれば他の人とは性交渉をしていないという暗黙の前提の方が、デフォルトであると思われる。

Kippax らは、“negotiated safety”が HIV 感染予防方法として成立するには、「男性間で、誠実さ、検査、信頼、コミュニケーションといったテーマについてとりくむことを目的にした十全なプログラム」があるとよく、それによって目指されるべきは「男性間の明確で曖昧さのない合意」であると述べている³。

コンドーム・ネゴシエーションにつながる言語コミュニケーションについては、それがハッテン場での性交渉でどれだけ発生するのかという点も考察する必要がある。我々の研究では、すでに挙げた語りにも見られたように、ハッテン場で言葉を交わすことは稀にしかないことが示唆されている。これは、古い研究だが頻繁に引用される Humphery のイギリスの tea room (ハッテン場の1つ)における性交渉の人類学的調査でも、やはり報告されている。

また、Herinksson のスウェーデンの sex venue に関する研究では、sex venue が“hot” area と“protected” area とに空間的に分かれていること、性交渉はいわゆる“hot” area と呼ばれる場所で行われ、どちらの場所に身を置くかによって、性的な関心の有無を非言語的に伝えていることを明らかにしている⁵。我々の調査でも、ゲイバー等において、明るい部分と奥の電気が暗くしてある部分とに空間が分けられている所があるとの報告があった。ここでは、奥に行くという行為が性交渉をもつことの同意とみなされるわけだが、コンドーム使用の文脈からすると、使用の合意が「明るい部分」で完了することが鍵になってくるのであろう。

しかし、本研究で注目したハッテン場は、基本的に初めから言語コミュニケーションを排除している空間とみなされており、そこでは匿名性が保たれるとの認識がある可能性が示唆される。実際に cottaging という屋内型のハッテン場を利用するイギリス人 MSM134名を対象にした Churchらの研究では、cottaging を利用する理由として匿名性が保たれることをあげた者が 84%いた⁶。こうした言語コミュニケーションを基本的に排除した環境下では、コンドーム・ネゴシエーションの展開は望みにくい。

加えて、ハッテン場での性交渉に対して高いリスク意識をもち、コンドームを使う意図を対象 MSM がもっていたとしても、それが完全に実行されているかは曖昧な点が残る。例えば、MAR の語りを詳しく見ると、「100%使います」といいつつ、それに続く語りでは「後で不安になってしまうので、使うようには心がけています」という微妙な言い回しになっており、状況によっては使わないことがあることが暗示されているようにも読める。

対象 MSM は、非常に明確に交際相手との性交渉とハッテン場における性交渉を異なるものとして位置づけるのだが、砂川らの研究

では、約 36%の対象者が、「商業ハッテン場」で出会った人と交際関係に発展したことがあると答えた。これは、いいかえれば「不特定多数」から「特定」の関係への移行である。これが、意味づけのレベルでは両者は明確に異なる領域のものに位置づけられるが、実践のレベルでは両者が必ずしも二律背反的なものではない、ということの意味するのか、それともたまたま砂川らの対象または我々の対象の特性的な偏りによるものなのかは、定かでない。

しかし、意味づけのレベルでは、ハッテン場を基本的に友人や恋人と出会う場としてはみなさないことは、先行研究においても示されている。ただし、この点については留保を要する。というのも、我々の対象者においても、すでに提示したように、ハッテン場に対して初めは出会いの場としての機能を期待していたケースが見られた。さらに、ハッテン場を仲間の集いの場ともみなす見方も報告されている。

ハッテン場にいるすべて〔の人〕が「〔独りよがりな性欲充足的な〕体験談」のような行為をしているわけではありません。高校生とかタメが集まって会話とかしているグループとか、待ち合わせの場所でデートのように使うのも〔いる〕。

(MSD 30s: 65-6)

この語りは、東京や大阪のような大都市のハッテン場ではなく、都市部から遠い遠隔の地方都市におけるハッテン場であるということが、もしかしたらハッテン場の利用に関して多様性を生み出す元になっているのかもしれない。こうした可能性に鑑みると、ハッテン場そのものやハッテン場における性交渉の意味づけに関する今後の調査は、地域性にも十分に留意しながら行う必要があると思われる。

E. 結論

本研究では、インターネット利用層である MSM が、自らの性行為に対してどのような意味づけを行うのかについて、特にハッテン場での性交渉と交際相手との性交渉を中心に、コンドーム使用との関連で検討した。

Meyer らは、MSM は単一的にカテゴライズできるものではなく、社会経済的要因・性行為のタイプ・性行為を行う場所、などによって複数（14 カテゴリーを提示）のカテゴリーがあることを指摘している。その中で、bathhouse（ハッテン場の 1 つ）を利用する MSM は利用頻度が高く、コンドーム不使用の傾向があることも指摘されている⁷。また、Li らの中国での質的研究でも、コンドームを使わないアナルセックスはハッテン場で頻繁に行われていると述べられている⁸。この結果は、本研究が対象としたハッテン場を利用する MSM が諸外国の MSM 同様に HIV 感染リスクに曝されている集団として、支援の必要性の高い集団であることを示唆している。

ただし、HIV 感染予防の施策を考える上で、ハッテン場での性交渉を無暗にリスク視するのではなく、多くの性的に活発な MSM にとって彼らの日常的なライフスタイルを形成する場、あるいは彼らの文化の一部である場とみなした上で、予防対策を検討すべきと我々は考える。

感染リスクが最も高いのは、交際相手と性交渉しつつハッテン場で不特定多数と性交渉をもつクロスオーバー集団である。彼らのライフスタイルや文化を尊重しつつ予防を考えるのならば、ハッテン場での性交渉を控えるよう促したり、交際相手とのステディな性関係に限定するよう働きかけたりすることは、上策とはいえない。むしろ Kippax らの“negotiated safety”の実効性を、こうした日本の MSM の文化的特性を参照しつつ、あらためて吟味してみることの方が有用であると考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

現在英文論文を準備中。

2. 学会発表

Yamazaki H, Yokoyama Y, Hidaka Y: Sexual Behavior of Japanese Men who have Sex with Men: some implications for HIV prevention, The Sixth International Congress on Health Behavioral Science, September 20, 2010: University of Malaya, Kuala Lumpur, Malaysia.

G. 参考文献

- ¹ 波平恵美子・小田博志（2010）『質的研究の方法——いのちの〈現場〉を読みとく』東京：春秋社，59-60.
- ² 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』東京：弘文堂.
- ³ Kippax S, Noble J, Prestage G, Crawford J, Campbell D, Baxter D & Cooper D. (1997) Sexual negotiation in the AIDS era: negotiated safety revisited. *AIDS*, 11, 191-197.
- ⁴ 砂川秀樹，生島嗣，篠原欣介，富沢一洋，市川誠一，木原正博（1997）「男性と性行為を行う男性に対する HIV 感染予防啓発プログラムのあり方に関する一考察——ワークショップを利用した定性的調査とパソコン通信を通じた定性的調査から」『平成 9 年度 HIV 感染症の疫学研究』
http://www.acc.go.jp/kenkyu/ekigaku/98ekigaku/eki_10/eki_10.htm, 2011 年 3 月 13 日閲覧.
- ⁵ Herinksson B & Mansson S-A, Sexual negotiations: A ethnographic study of men who have sex with men. In H.P. Brummelhuis & G. Herdt (ed), *Culture and Sexual risk: Anthropological perspectives of AIDS*, New York, Gordon & Breach, pp157-182

-
- ⁶ Church, J., Green, J., Vearnals, S. & Keogh, P. (1993) Investigation of motivational and behavioural factors influencing men who have sex with other men in public toilets (cottaging). *AIDS Care*, 5, 337-46.
- ⁷ Meyer, W., Costenbader, E. C., Zule, W. A., Otiashvili, D. & Kirtadze, I. (2010) 'We are ordinary men': MSM identity categories in Tbilisi, Georgia. *Cult Health Sex*, 12, 955-71
- ⁸ Li A, Varangrat A, Wimonasate W, et al. (2010) Sexual behavior and risk factors for HIV infection among homosexual and bisexual men in Thailand. *AIDS Behav*, 13, 318-27.

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

Ⅲ 研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
日高庸晴、金子典代	Men who have Sex with Men における HIV 感染の動向と行動疫学調査から見える現状	日本エイズ学会誌	12	6-12	2010
橋本充代、日高庸晴	インターネットを用いた HIV 及び近接領域の介入プログラムの効果について：文献レビューによる検討	日本エイズ学会誌	12	193-20	2010

特集：エイズの現況と動向

Men who have Sex with Men における HIV 感染の動向と
行動疫学調査から見える現状The Current Trend of the HIV Epidemic among MSM in Japan
according to Epidemiological and Behavior Survey Data日 高 庸 晴¹⁾, 金 子 典 代²⁾Yasuharu HIDAKA¹⁾ and Noriyo KANEKO²⁾¹⁾ 関西看護医療大学看護学部²⁾ 名古屋市立大学看護学部¹⁾ School of Nursing, Kansai University of Nursing and Health Sciences²⁾ School of Nursing, Nagoya City University

はじめに

Men who have Sex with Men (MSM) はわが国の HIV/AIDS サーベイランス開始以来現在まで、最も対策が必要な対象層であり、効果的な対策の推進は喫緊の課題である。本稿では当該集団における HIV 感染の動向と国内で実施されてきた行動疫学調査から示される現状を概観することを通じて、今後の必要な対策について考察する。

アジアの MSM に関する状況

2000 年に入ってから、中国、タイ、インドなどのアジア諸国において MSM の HIV 感染拡大状況の把握のための疫学調査が実施されてきている¹⁾。現時点ではほとんどのアジア諸国において MSM における HIV/AIDS 発生報告数の増加が顕在化しつつあり、今後も感染者は増加の一端を辿ることが予測されている^{1,2)}。このようなアジア地域の MSM における HIV 感染の急速な拡大を受け、WHO が現状把握と必要なアクションを選定する作業に入っている³⁾。MSM における感染拡大に国際的にも注目が集まり東南アジア地域において、米国疾病予防管理センター (CDC) や国連開発計画 (UNDP) などの機関による MSM 向けのエイズ予防対策が実現されつつある。しかし、海外からの資金や技術援助によってプロジェクトを行う場合、プロジェクトの内容や実施期間は、援助機関の財政および政策状況に大きく左右されており、不安定要素が多い。プロジェクトが自国で生まれ発展したものでない場合、継続性について様々な困難があることが予想される。またアジア太平洋地

域では、かつて英国支配下にあった国を中心にインド、マレーシアなど 14 カ国に男性間の性交渉を禁じるソドミー法が存在している。このような背景から国家が進んで MSM 予防対策を実施するケースは少なく、当事者組織が大きな力を持ち、国のエイズ対策に圧力を与えることが出来るような行動を取れる国は非常に限られている。アメリカ、オーストラリアをはじめとする MSM における感染拡大を早期に体験した国のように、当事者団体がアドボカシーを行うことによって MSM 向けの予防対策の資金を獲得する当事者運動の実現は、アジア諸国では極めて困難であり、家父長制の文化を色濃く残す東アジアにおいて MSM に特化したエイズ予防対策モデルはほとんどない。わが国の隣国であり、経済基盤、社会・文化的背景においても共通点が多く、人的交流も盛んな韓国、台湾においても今日、HIV 感染症が MSM に与える影響は深刻な状況になっている。

日本の HIV の発生動向

厚生労働省エイズ発生動向年報⁴⁾によれば、これまでの HIV 感染者の年間報告数の年次推移をみると、1992 年に一度ピークに達したのちに減少に転じたが、1996 年以降はほぼ増加傾向が続き、2008 年の報告数は過去最高の 1,126 人となった。HIV 感染者の累積報告数を国籍および性別によって分類をすると、日本国籍男性の報告数が 1990 年代後半から急増しており、わが国では日本国籍男性においてもっとも HIV 感染が拡大しているといえる。その日本国籍男性 HIV 感染者の年次報告数を感染経路別にみると男性同性間性的接触の割合は 2000 年以降上昇傾向にあり、現在ではその約 7 割を占めている。一方 AIDS 患者の累積報告数を国籍および性別による分類をすると、HIV 感染同様に日本国籍男性の増加が認められている。これまで、日

著者連絡先：日高庸晴 (〒656-2131 兵庫県淡路市志筑 1456-4
関西看護医療大学看護学部)

2010 年 1 月 31 日受付

本国籍エイズ患者の40%前後は異性間性的接触による感染で占められていたが、2000年以降は男性同性間性的接触による報告も増加傾向にある。エイズ動向年報においても、HIV感染は男性同性間性的接触に多く、AIDS症例は異性間性的接触による報告が多いが、AIDS症例の報告は比較的年齢層が高いことや臨床医からの報告を考慮すると実際は同性間性的接触による感染である可能性を否定できない。サーベイランス開始以来わが国のHIV感染は圧倒的にMSMに集中しており、より真のHIV感染拡大の状況を把握するためには、MSM母集団(人口規模)の推定およびHIV検査受検行動の実態を把握したうえで、実際の程度の感染者がサーベイランスにより捕捉されているのかを把握することが非常に重要となる。

MSMの人口規模

一体MSMは何人いるのか。わが国におけるMSMの人口規模についてのデータが非常に限られていることも、HIV陽性者の捕捉率を算定する上での障害となっているのみならず、MSMの存在を可視化困難にしており、当該集団におけるHIV感染拡大の深刻さや健康問題の提示を難しくさせている。

1997年から開始された厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV感染症の疫学に関する研究(主任研究者:木原正博)」における一般住民を対象とする全国層化二段階無作為抽出の性行動調査では、男性の同性との生涯性経験割合は1.2%と示された。ゲイ・バイセクシュアル男性は全人口の5%にも満たないにも関わらず、毎年報告される日本国籍HIV感染者のうちの約7割という圧倒的多数が男性同性間性的接触による感染であるということは、いかにMSMにおける感染拡大が深刻であるかということであろう。2009年の日本エイズ学会学術集會では男性の同性間生涯性経験割合は1999年に示された1.2%よりさらに高く2.0%近い可能性を示す結果が発表⁵⁾され、今後の詳細な報告が期待される。MSMの母集団を把握・推定し、HIV有病率と罹患率をモニタリングすることは効果的なHIV予防対策を実施する上でも非常に重要であるため、MSMの人口規模については定期的に調査を実施していく必要があるだろう。

日本で行われてきた主なMSM研究

一時帰国していたアメリカ在住の日本人ゲイ男性を第1号エイズ患者であると当時の厚生省が認定したことを皮切りに、エイズ=同性愛者という印象が多くの国民に植え付け、社会的スティグマが付与されたと言わざるを得ない。HIV/AIDSの正しい知識が国民に十分に浸透していたとは言えない段階で、特定集団の特殊な病気という誤った認

識を多くの国民が抱いてしまったことにより、HIV感染症そのものへの差別や偏見は増長されたとも言える。さらにHIVの出現により同性愛者への差別と偏見、そして無理解は強化された。HIV感染拡大に相まって欧米でも質問紙による行動疫学調査が試行・開発・実施されていくが、わが国ではその経験の蓄積が無く、当初は試行錯誤であった。初期の質問紙調査での失敗例として、ゲイ男性の性行動のうち、アナルセックスで挿入する側を男役と称し、挿入される側を女役と表す質問項目があった。これにより、研究者がゲイ男性の性行動やアイデンティティの実際を正しく理解していないことを体現してしまい、ゲイコミュニティ側に調査嫌いや研究者不審の感情を植え付けることにつながったとも言えるだろう。結果としてこれらの同性愛嫌悪的な社会的風潮はゲイ男性自身にも内面化され、性行動をはじめとする行動疫学研究の実施が困難な時期が続いた。

わが国のMSMを対象にしたHIV予防研究の開始は、1986年の名古屋のゲイサウナにおける採血とHIV抗体検査の結果告知を組み合わせた血清疫学研究⁶⁾であろう。その後、1996~1997年に実施された東京都内のハッテン場における廃棄ティッシュペーパーによる疫学調査⁷⁾を経て、研究者と当事者コミュニティの協働体制を明確に打ち出した行動疫学研究が本格的に試行・開始され、2000年にはゲイコミュニティのお祭り⁸⁾とHIV抗体検査を組み合わせたSWITCHと称される画期的なイベントが大阪で開催された(表1)。以降現在まで日本におけるMSM対象のHIVの疫学や感染予防に関わる最大規模の対策は、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業によるプロジェクトで担われている。この頃からMSM当事者を巻き込んだコミュニティベースの介入研究が開始され、その質の向上と規模の拡大が今日まで続いている。また、同時期にゲイNGOである動くゲイとレズビアン⁹⁾の会が研究班に参画した介入研究として「出会いイベント」の実施およびその場における質問紙調査がある⁸⁾。「出会いイベント」とはゲイバーを中心とした夜の繁華街のみがゲイ同士が会おう主たる方法であった当時に、アルコールの介在しない昼間の出会いの場の提供と同時にHIV予防啓発を兼ねたイベントである。これはゲイコミュニティのイベントと研究を結びつけた初期の取り組みであった。コミュニティを介入フィールドとしたさらに大規模な研究はこの10年間に大阪、東京を中心に開始され、当事者の視点を重視した介入資材の啓発と普及のみならず、効果評価のための調査も合わせて実施する形で発展・拡大している。

コミュニティベースの予防介入の実施状況と効果評価

ゲイコミュニティにおける予防啓発の実施と評価の研究は、2009年12月時点で、厚生労働科学研究費補助金エイ

表 1 ゲイ・バイセクシュアル男性対象の HIV 抗体検査イベント (血清疫学調査)

イベント名称	都市	実施時期	受検者数	HIV 抗体陽性率		B 型肝炎抗体陽性率		TPHA (梅毒) 陽性率	
				%	人数	%	人数	%	人数
SWITCH2000	大阪市	2000 年 5 月	245	2.4	6	0.4	1	14.7	36
SWITCH2001	大阪市	2001 年 5 月	395	3.3	13	1.5	6	15.9	63
Golden-SWITCH2002	大阪市	2002 年 5 月	148	0.7	1	0.7	1	19.6	29
Summer-SWITCH2002	大阪市	2002 年 8 月	152	1.3	2	2.0	3	19.1	29
NLGR2001	名古屋市	2001 年 6 月	148	2.7	4	2.7	4	14.9	22
NLGR2002	名古屋市	2002 年 6 月	304	2.3	7	2.0	6	14.1	43
NLGR2003	名古屋市	2003 年 6 月	346	1.2	4	1.4	5	17.1	59
NLGR2004	名古屋市	2004 年 6 月	439	2.7	12	2.3	10	18.5	81
NLGR2005	名古屋市	2005 年 6 月	425	2.1	9	2.2	9	14.3	58
NLGR2006	名古屋市	2006 年 6 月	471	4.5	21	1.8	6	14.9	70
NLGR2007	名古屋市	2007 年 6 月	538	2.2	12	1.1	6	11.6	60
NLGR2008	名古屋市	2008 年 6 月	439	1.8	8	—	—	—	—
臨時検査会 (M 検) 2008	名古屋市	2008 年 12 月	92	5.4	5	—	—	—	—

ズ対策研究事業の「男性同性間の HIV 感染対策とその介入評価に関する研究 (研究代表者: 市川誠一)」の活動が最も大きな規模のものとなっている。当該研究班と協働している当事者 NGO として、東北地域は“やろっこ”, 東京は“Rainbowing”, 名古屋は“エンジェルライフナゴヤ”, 大阪は“MASH 大阪”, 九州は“Love Act Fukuoka (LAF)”, 沖縄には“なんくる”が存在し, それぞれコミュニティレベルでの商業施設向けのアウトリーチ, HIV/STI 予防のための勉強会等の活動を展開している (表 2)。また, 地域の MSM 向けの HIV 予防啓発活動の拠点となるコミュニティセンターが東京, 大阪を先駆けに, 名古屋, 博多に設置されており, 厚生労働省およびエイズ予防財団のコミュニティセンター事業として運営されている。90 年代後半から大阪と東京で開始された MSM 向けの予防対策研究事業については過去の論文に述べられているが, 各地域ではゲイバー, クラブ等の商業施設の利用者に対する介入を行ってきており, その効果は配布しているコンドームや情報資料, コミュニティセンターの認知, 予防啓発イベント参加や開催認知の向上, HIV 抗体検査受検経験割合の上昇として表れつつある。特にここ 5 年の間には NGO が主催するイベントの来場者や予防啓発資料を集中的に配布しているゲイバーの顧客などを対象者とする質問紙調査を各地域で実施しており, MSM の HIV 感染予防に資するデータの集積が進み, 介入評価や実態把握のための研究を定期的に実施できる基盤が整っている。

これまでに実施してきた介入活動により一定の効果が示されているが, これらはエイズ対策研究事業として行われ

たモデル的的事业である。先にも述べた MSM 人口の母集団を考えるとさらにこの事業を発展的させ, 他地域にも拡大し継続する方法を考案していく必要がある。また, MSM 向けの商業施設に行かない当事者が相当数存在することも推定され, MSM の中でもより一層の接近困難層へどのような戦略のもとに介入を推進することが可能であるか, その検討と実施も急務である。

インターネット空間は最大のコミュニティ —全国インターネット MSM 調査—

コミュニティレベルの予防対策研究が開始された時を同じくして, インターネットによる横断研究も活発に実施されるようになった。90 年代にはパソコン通信を用いたゲイ男性対象の調査研究などいくつか実施されたが⁹⁾, インターネットを用いたわが国初の学術研究は 1999 年に実施された「ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスに関する研究 (有効回答数 1,025 人)¹⁰⁾」である。インターネットを学術調査の方法として試行する黎明期から, ゲイ男性を対象にしたこの調査が開始され, その後シリーズとして発展している。これまでに通算 7 回実施されており, 近年の調査では 1 回あたりの研究参加者が 5,000~6,000 人規模にのぼり, 累積研究参加者数は 2 万人を超える全国調査に成長している¹¹⁾。

一連の調査によれば, HIV 抗体検査の生涯検査受検経験割合は全国平均 41.7%~44.9%, 過去 1 年間では 22.6%~24.1%, 自己申告の HIV 陽性割合は 2.8%~5.3% であり (表 3), 何れの割合も地方都市よりも都市部の方がその割

表 2 各地域でのコミュニティベースでの主要な介入と効果評価調査

地域	拠点	NGO 名称	コミュニティセンター	予防介入プログラム (コミュニティセンター運営は除く)	効果評価調査
東北	宮城県 仙台市	やろっこ		コンドームアウトリーチ LT ラウンジ (陽性者手記朗読) イベント (クラブ, スポーツイベント) での資材配布 WEB 開設	クラブイベント来場者調査 スポーツイベント来場者調査 携帯電話調査
東京	東京都 新宿区	Rainbow Ring	acta (新宿区)	コンドームアウトリーチ コミュニティ向け acta のペーパー (月1回) LT ラウンジ (陽性者の手記朗読) 各ベニュー向け啓発資材 (冊子) の 開発と配布 WEB 開設	クラブイベント来場者調査 商業施設 (バー) 利用者調査 バーオーナーインタビュー 調査 携帯電話調査
東海	愛知県 名古屋市	エンジェルライフ ナゴヤ	rise (名古屋市)	検査会つきイベント NLGR コンドームアウトリーチ コミュニティペーパー 勉強会 WEB 開設	NLGR 来場者調査 NLGR 受検者調査 携帯電話調査
関西	大阪府 大阪市	MASH 大阪	dista (大阪市)	コミュニティペーパー 大型啓発イベント (PluS+) コンドームアウトリーチ 勉強会 若者向けサークル 各ベニューへの啓発資材の開発と配布 WEB 開設	クラブイベント来場者調査 商業施設 (バー) 利用者調査 携帯電話調査
九州	福岡県 福岡市	Love Act Fukuoka (LAF)	haco (福岡市)	コミュニティペーパー コンドームアウトリーチ 勉強会 WEB 開設	商業施設 (バー) 利用者調査 携帯電話調査
沖縄	沖縄県 那覇市	なんくる		コミュニティペーパー コンドームアウトリーチ WEB 開設	

表 3 インターネット調査から示される HIV 抗体検査受検経験割合と HIV 陽性割合

	実施時期	研究 参加者数	HIV 抗体検査 (生涯)	HIV 抗体検査 (過去1年)	HIV 陽性 (自己申告)
SPRITS@Wave 2	2003年2月28日~5月16日	2,062		23.7	2.8
REACH Online 2005	2005年8月11日~11月30日	5,731	41.7	22.6	5.3
REACH Online 2007	2007年8月1日~2008年1月7日	6,282	43.3	22.6	3.2
REACH Online 2008	2008年7月18日~2009年1月6日	5,525	44.9	24.1	4.5

合の高さは顕著であった。HIV 抗体検査生涯受検経験割合は、インターネット調査や商業施設利用者対象の質問紙による調査に関わらず、最も高い割合でも 50% 台であり、特に 40 歳以上の中高年層では低くなるのがこれまでの調査によって示されている。当該集団は、HIV/STI への関心が概して高く、異性愛男性よりも検査受検割合が高いことが示唆されているものの、未だに検査経験が一度もなく感染状況がわかっていない者が半数近くいることが考えられる。アメリカ合衆国では若年層 MSM の HIV 抗体検査生涯受検経験割合は 86% であり¹²⁾、わが国でも HIV リスク認識向上のための予防介入、検査環境と相談体制のより一層の整備を推進すると共に、検査受検割合の向上を図る必要がある。また、性行動の実際は、2008 年調査によれば全体の 87.2% が過去 6 カ月に男性とセックス経験があり、そのうちアナルセックス経験者は 81.5% であった。セックスの相手が特定であれ不特定であれ、アナルセックスで挿入側・被挿入側の違いに関わらずコンドーム常時使用割合は 35.0%¹³⁾ であり、インターネット調査で示されるコンドーム常時使用割合は国内 MSM 研究で示される結果のなかでも最も低率である。

メンタルヘルス、いじめ被害・自殺未遂割合

インターネット調査で示される MSM の特徴として、HIV のみならず数多くの健康問題を抱えていることが挙げられる。全体の 47% が抑うつ、78% は先の見通しのつかない不安傾向を持つ特性不安であり、非異性愛である性的指向がゆえに感じる心理的ストレス¹⁴⁾ に起因して、数多くの心理的症状が発現している場合が多い。彼らの多くは周囲に自らの性的指向が知られてしまうことがないように気遣うことにより、異性愛社会に懸命に適応しようとしているが、それは極度の「イイコ行動」に担保された自己抑制型行動特性の現れでもあり、異性愛者を装う心理的葛藤の再生産の繰り返しでしかない。メンタルヘルスの悪さは調査の度に示されており、再現性のある結果であることから、当該集団において普遍的な健康課題とも言えるだろう。

全体の 82% が学齢期においていじめ被害経験があり、59.6% は「ホモ・おかま・おとこおんな」といった言葉の暴力被害経験があった。性的指向に関連するいじめや揶揄は児童・生徒同士のみで発生するのではなく、時に教員から発せられることもあることが調査からわかっている。さらに自殺を考えたことがある者は 64%、自殺未遂経験割合は 15.1% であった¹⁵⁾。大阪ミナミの繁華街で 2,000 人の若者男女を対象にした街頭調査では、自殺未遂経験について異性愛者との比較を行っている。その結果、非異性愛者の自殺未遂経験割合は、異性愛者のおよそ 6 倍であり、他の要因を調整してもなお性的指向と自殺未遂経験の関連が強

かった¹⁶⁾。また、自尊心の低さは HIV 感染リスク行動に関連している¹⁷⁾ という報告もあることから、MSM における抑うつの改善や自尊心の向上を図るプログラムも今後必要であろう。

学齢期に適切なセクシュアリティ教育の提供が必要になるが、現行の学習指導要領に「性的指向」や「セクシュアリティ」の文字はなく、国のガイドラインによって何ら定められていないのが現状である。学校という社会の中で、自分が持っているかもしれない性的指向を否定や揶揄、嫌悪を受けるものとして認識し始めるのと、多様な在り方のうちのひとつであり人間としての価値差を意味しないこととして認識し始めるのとでは、その後の人生の方向性が大きく異なってくるものと考えられる。同性愛や両性愛への否定的なメッセージを強く受けるほど、疎外感や不安を感じ、しかもそう感じていることすらも隠さなければいけない（つまり感じていない振りをする）という二重のストレスに同時にさらされることになるだろう。性にまつわる教育カリキュラムの見直しや改善も求められるが、それ以前に、教育現場にいる大人が、性的指向について周囲との違いに疎外感を持ったり、自分自身でも違和感を持つなどして密かに悩む生徒や児童が今現在身近にもいるのかもしれない、という想像力を持つ必要がある。そして自分たちの日頃の何気ない言動の中に異性愛以外の性的指向を否定するようなメッセージが含まれていないか、またそのことがどれほどの影響を与えているのかについて振り返ってみることが望まれる¹⁸⁾。

今後必要とされる施策と対策

わが国で MSM 対象の HIV 予防研究が活発に行われるようになって 10 年が経過した。前述のとおり厚生労働科学研究の枠組みでの実施が大半を占めるが、当該集団における HIV 感染の拡大状況を鑑みれば圧倒的にマンパワー不足と言わざるを得ない。MSM を対象に調査研究を実施する場合、ゲートキーパーとなるコミュニティのキーパーソンとの信頼関係樹立や、彼らが仲介した質問票の配布など協働・連携作業がある。現在は予防啓発や効果評価のための質問票調査の実施にあたっては NGO/CBO の役割が大きくなり、コミュニティセンターの要員がそれらを兼ねている場合も多い。しかしながら、研究者不足と同様に予防啓発活動を担う人材や、コミュニティセンターの運営など非常に限られた人数で行われているのが現状である。現在ではコミュニティセンターのプログラムの多くをボランティアスタッフに依存しているためプログラムの拡大の方向性が図りづらく、人手不足の悪循環が続いている。例えば米国における HIV 予防介入研究の場合、主任研究者のもとに博士号を取得したポスドクによるリサーチアシスタ

トや、コミュニティを対象にしたアウトリーチワーカー、質問紙調査を担当するインタビュワー、サーベーター、事務や会計担当など多くのスタッフによって構成されている。これら人員全てを雇用可能な比較的規模の大きな研究費が国立健康研究所 (National Institute for Health : NIH) や国立精神健康研究所 (National Institute for Mental Health : NIMH), 国立薬物依存研究所 (National Institute on Drug Abuse : NIDA) から拠出されている。米国における HIV 予防研究はカリフォルニア大学サンフランシスコ校エイズ予防研究センター (Center for AIDS Prevention Studies : CAPS, University of California, San Francisco) が最先端かつ大規模であるが、1つの研究プロジェクトに多くの当事者を採用することによって、HIV 予防の仕事で雇用を生み出し、それぞれの人材の固有のネットワークをも有効活用することによって対策を推進するとともに、その効果評価を測定している。あるいは研究を申請する段階で、大学に所属する研究者と NGO/CBO の共同研究であることが研究費申請要件のひとつになっている場合もあり、必然的にコミュニティへ配分される予算も計上されている。諸外国の HIV 対策においては有給の仕事が、わが国では無償のボランティアベースあるいは、限られた人員の有給スタッフのみで担われているところが特徴的である。

これまでのコミュニティを対象にした研究では、各地域の独自性、習俗、文化等々に配慮して全国画一的な対策や効果評価はほとんど行われてきていない。しかしながら HIV 感染の拡大が都市部から地方へと全国的に拡大している現在、地域性を考慮するとともに一部共通の介入戦略とモニタリング項目を設定した上で、調査実施方法もある程度統一した上で定期的なモニタリング調査を行っていく必要があるであろう。その際、インターネットによる全国調査の結果と各地域の調査結果を総合的に検討することで MSM 全体像の把握が可能になるだろう。

また、教育や医療従事者 (医師、看護師ら)、HIV 抗体検査従事者 (保健師など)、カウンセラー (臨床心理士、スクールカウンセラー)、ソーシャルワーカーなどを対象にした研修機会も必要である。同性愛をはじめとするセクシュアリティについてそれぞれの専門職養成課程で十分に扱われていないのが現状である。一般に、医療における専門職であっても性については忌避的態度や消極的関わりあるいは、強い嫌悪感を抱かせるテーマであり、何も知識や情報がない状態で MSM に直面すれば誤解などが生じて不思議ではない。それゆえに、それぞれの職種の専門性を活用可能なかたちで、MSM 理解と支援のための包括的研修プログラムが必要であろう。

また、これらを推進する上で国家予算や地方自治体の政策を整備すると共に予算を確保する必要がある。ゲイ・バ

イセクシュアル男性は異性愛者に比較すれば可視化困難な社会的少数者・性的少数者であり、あらゆる施策の対象となりづらい。それは HIV 対策においても同様であり、異性愛者を主たる対象層と想定した一般的な予防啓発は行われやすいが、地方自治体や教育機関が MSM を対象にした事業を行うことは決して多くない。厚生労働科学研究の枠組みでは MSM は重点対象として比較的捉えられているように錯覚するが、新規感染者の圧倒的多数が MSM であることを鑑みれば、国が計上するエイズ対策研究事業の年間予算のうち極わずかが MSM の予防対策に充てられている現状は決して十分とは言えないだろう。

ま と め

わが国の HIV 感染者の報告のうち MSM が占める割合は圧倒的に高く、HIV 感染症の影響を最も強く受けている集団であることが明白である。この 10 年間で MSM における大規模な行動疫学調査がインターネットやコミュニティで実施されるようになり、実態把握と予防活動の評価実施が可能な体制が整った。加えて調査研究からは、MSM におけるメンタルヘルス、いじめなど生育歴における多様かつ深刻な健康問題が山積していることも明確になりつつある。今後、より効果的なわが国の MSM における HIV 感染症の予防対策を推進するためには、疫学を中心とした予防介入プログラムのみならず、MSM のコミュニティにおける当事者による活動の支援の強化や、医療や教育現場での支援、MSM 理解と支援のための研修機会など、戦略的かつ包括的なプログラムを立案するとともに、強力に推進していく必要があるだろう。

文 献

- 1) van Griensven F, de Lind van Wijngaarden JW, Baral S, Grulich A : The global epidemic of HIV infection among men who have sex with men. *Curr Opin HIV AIDS* 4 (4) : 300-307, 2009.
- 2) Baral S, Sifakis F, Cleghorn F, Beyrer C : Elevated risk for HIV infection among men who have sex with men in low- and middle-income countries 2000-2006 : a systematic review. *PLoS Med* 4 : e339, 2007.
- 3) World Health Organization : Prevention and treatment of HIV and other sexually transmitted infections among men who have sex with men and transgender populations : report of a technical consultation, 15-17 September 2008, Geneva Switzerland. Geneva, World Health Organization, 2009.
- 4) 厚生労働省 エイズ動向委員会 : 平成 20 年エイズ発生動向年報. 厚生労働省, 2009.